

宇佐美ゼミ ドイツ旅行体験記

その他のタイトル	Seminarreise nach Deutschland unter der Leitung von Prof. Usami
著者	上田 愛
雑誌名	独逸文學
巻	61
ページ	217-221
発行年	2017-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/10875

宇佐美ゼミ ドイツ旅行体験記

上田 愛

2010年3月に、宇佐美先生とゼミ生で、「ゲーテ街道」と呼ばれるルートに沿って旅をしました。今回は、このゼミ旅行について報告します。

旅行の拠点となったのは、フランクフルト・アム・マイン、エアフルト、ベルリンですが、この他にも、ヴェッツラーやハーナウ、シュタイナウ、アルスフェルト、アイゼナハ、ヴァイマル、デッサウ、ポツダムなどを回りました。ゲーテやシラー、グリム兄弟など代表的なドイツ文学に興味がある人はもちろん、ドイツの芸術運動、とりわけバウハウスに興味がある人にもお薦めしたい旅行ルートです。

「バウハウス」(Bauhaus)とは、1919年にヴァイマルで設立された美術や建築のための専門学校のことで、デッサウ、そしてベルリンへと移転したあと、ナチス政権によって1933年に閉校に追いやられました。当時の私はバウハウスの調査をしていたので、「聖地」であるヴァイマルとデッサウ、そしてベルリンを実際に訪ねることができて、とても良い経験になりました。

バウハウス関連の遺産のうち、ヴァイマルとデッサウのものは1996年にユネスコの世界遺産に登録されています。デッサウのバウハウス校舎もそのうちのひとつですが、今回の旅行で訪れたなかでは、とくにこの校舎のたたずまいに感動しました。その外観は本に掲載された写真で知っていましたが、実物にはその何倍もの美しさがあり、「現地に行き、現物を見る」という調査旅行の重要性を認識させてくれました。著名な家具デザイナーでバウハウスの教官でもあったマルセル・ブロイヤーの「ワシリー・チェア」など、校舎内の展示物もとても充実しており、一日中ながめていたいと思ったほどです。一方、ヴァイマルには、バウハウスの理念を受け継ぐバウハウス大学や、バウハウス初期の作品が展示されているバウハウス博物館があり、こちらも見応えがあります。



残念なことに、私たちが訪れたとき、ベルリンのパウハウス資料館は閉まっていた。実は、この資料館には2009年夏にも来たことがあったのですが、その時は貸し出しなどで展示物がほぼ皆無という状態でした。この資料館をまともに見学できる日は来るのだろうか、と暗い気持ちになりましたが、その後

すぐに立ち直ることができました。というのも、ベルリンの新ナショナルギャラリーで、パウハウスで教官をしていたクレーヤカンディンスキー、ファイニンガーの作品を見ることができたからです。ほかにも、ドイツ表現主義の絵画やオランダのデ・ステイル、モンドリアンの作品などがあり、充実した内容でした。しかも、新ナショナルギャラリーの建物自体がパウハウス最後の校長ミース・ファン・デル・ローエの設計によるものだったので、その空間にいただけで心躍りました。

パウハウスの話ばかりになってしまったので、ここからはそれ以外の旅の思い出や観光名所を紹介します。

まずは、私たちの最初の滞在地、フランクフルト・アム・マイン。印象に残ったのは、レーマー広場の美しい市庁舎と周辺の可愛い木組みの家です。朝早く来たので観光客も少なく、ゆっくり見物できました。その日は天気も良く、マイン川沿いを散歩していると爽やかな気分になりました。また翌日には、ザクセンハウゼン地区の居酒屋でフランクフルト名物のリング・ワインを注文し、ソーセージとザワークラウトという典型的なドイツ料理を食べるなど、観光気分の楽しいひと時も過ごしました。

ドイツに到着してすぐのことですが、中央駅の構内でソーセージとパンを買い、ベンチに座って食べながら周囲を見まわすと、なんだか自分ももうドイツの生活に溶け込んでいるような気分になりました。おなじように、ホテルでの朝食の際、大きなパンをナイフで薄く切りとってバターをぬって食べたり、色々な種類のハムをはさんで食べたり、そいう

う何気ない日常的な行為にもドイツの生活を実感することができました。ちなみに、スプーンで殻をわって食べるというヨーロッパ式のゆで卵の食べ方は、慣れていないとかなり難しいです。ところが、宇佐美先生はこのヨーロッパ式を完璧にマスターされていて、きれいにゆで卵を食べておられました。先生のドイツ滞在経験の豊富さが垣間見えた瞬間でした。

フランクフルト滞在中には、近郊の小さな町ヴェッツラーにも行きました。この町はガイドブックにも載っていない穴場スポットで、私はこのゼミ旅行で初めてこの町の存在を知りました。ゲーテが愛したシャルロッテ・ブッフの家がある可愛らしい小さな町なので、『若きウエルテルの悩み』の世界に興味がある人には、ぜひ訪れてみてほしいです。

2番目の滞在地エアフルトへ向かう途中で、グリム兄弟とグリム童話に縁のあるハーナウとシュタイナウ、アルスフェルトに寄りました。ハーナウではグリム兄弟の像を見て、シュタイナウではグリム兄弟の家を見学しましたが、この3都市のなかでは個人的にアルスフェルトが一番気に入りました。アルスフェルトはメルヘン街道沿いの町のひとつで、赤ずきんちゃんの故郷とされている町です。可愛らしい木組みの家が立ちならぶ細い路地を歩いていると、絵本の中に入り込んだみたい気分になります。また、この地方の民族衣装は可愛らしく、とても印象的でした。

エアフルト滞在中に寄ったアイゼナハ郊外のヴァルトブルク城は、中世のロマンあふれる、どっしりとした城です。このときは城の一部が修復中だったことが少し残念ですが、ルターが聖書を翻訳した部屋は、ちゃんと見学することができました。それから、アイゼナハでは、バッハの家とルターの家を見学しました。立派なバッハの像もあり、バッハ好きにはたまらない町だと思います。夕方にアイゼナハからエアフルトへ戻り、クレーマー橋などを訪れました。この町の観光名所のなかでは、大聖



堂がとくに気に入りました。薄暗くなってきた頃の大聖堂のライトアップが本当に綺麗で、記念に絵はがきを買って机の上に飾っていたほどです。

エアフルト滞在中には、ヴァイマルも訪問しました。ゲーテとシラーの像があり、その向かいにバウハウス博物館があり、ゲーテの家、シラーの家があり……本当に見どころの多い町です。ちなみに、昼食時にレストランでピザを注文したのですが、大きすぎて半分しか食べられず、テイクアウト用に包んでもらうことにしました。そういうわけで、ヴァイマル観光の残り半分は、ピザの配達員のごとくピザの箱を持ってすることに。ゲーテとシラーの墓も、ピザを持ったまま訪れました。すれ違うドイツ人にかなり見られましたし、今だからこそ笑って話せますが、そのときはかなり恥ずかしかったです。

最後の拠点ベルリンへ向かう途中で、デッサウとポツダムに寄りました。すでに書いたように、デッサウではバウハウスを訪れました。ポツダムでは新宮殿を見学し、サンサーシ宮殿をながめ、庭園を散歩しました。庭園の片隅にフリードリヒ大王の墓がありましたが、ちょうど雪が降っていたので、墓に雪が積もっていて、少し物悲しい雰囲気でした。

いよいよ最後の拠点ベルリンです。新ナショナルギャラリー、ベルリンフィルの建物内部の見学、ニコライ教会、ベルリン大聖堂、ブランデンブルグ門など観光名所をたくさん訪れましたが、とくに思い出深いのは、前述の新ナショナルギャラリーとフンボルト大学です。フンボルト大学は、宇佐美先生が2001年から1年間、研究滞在されていた大学で、先生は当時のことを懐かしんでおられるご様子でした。先生とご一緒に学生食堂で昼食をとったり、図書館に通いつめて研究されていたという当時のお話をうかがうことができたり、貴重な体験ができました。

ゼミ旅行最後の晚餐が最高だったので、そのことを書いて締めくくります。私たちは、ベルリンの„Zur letzten Instanz“（最終審亭）という歴史あるレストランで、アイスバインを食べながらベルリナーヴァイセを飲み、最高に贅沢なひと時を過ごしました。ここは、ナポレオンも訪れたという名店で、予約のお客さんでいっぱいでした。ゼミ旅行を締めくくる最後の夜にぴったりなレストランだったと思います。本当に良い店でした。

7泊9日の短い旅でしたが、ここに書ききれないほど充実したゼミ旅

行になりました。この報告で、このゼミ旅行の様子が少しでも伝われば嬉しいです。

最後に、私の希望だったゼミ旅行を実現してくださった宇佐美先生に、心から感謝いたします。行きと帰りの飛行機の中で、私とゼミの先輩は映画を見たり音楽を聴いたり快適な空の旅



を満喫していましたが、宇佐美先生はノートパソコンを開いて黙々とお仕事をされていました。お忙しい中、ゼミ旅行の引率をしていただき、本当にありがとうございます。先生のおかげで、この旅行をつうじてさまざまな経験をつむことができました。

